70年の歴史――PART Ⅰ

福岡 明

23歳7ヵ月で歯科医院を開業

歯科医師になって1年半しかたたない若造が、都心の日本橋で開業するなんて、今では夢のようである。

1948（昭和23）年、私は4年制教育だった東京歯科医学専門学校を卒業した。戦争のため、ろくに勉強ができないまま第三回歯科医師国家試験に合格してしまったが、このままでは何もできないと思い、慶應義塾大学医学部歯科学教室をめざした。12名の研究生枠に対して、各学校から48名が応募。私は運よく入局でき、研究生そして医学部の無給助手となり、宿直も任せてもらえるようになった。

慶應大病院歯科を退局したあと、1949（昭和24）年10月、茅場町にある焼けビルの3階8坪の部屋が空いていたので、図々しくも歯科医院を開業した。23歳7ヵ月、若造歯科医のスタートである。東京大空襲の焼け跡に建てた東日本橋（薬研掘）の自宅から人形町、水天宮を通り、茅場町の歯科医院まで徒歩で約20分、毎朝8時半には出勤し、掃除をしていた。この頃は、どこの歯科医院も歯科医師一人が診療準備から会計、アポイント取りまでこなしていた時代である。

昭和24年　茅場町会館3Fで開業した福岡歯科

新米の歯科医師の開業、果たして患者さんが来てくださるのかという不安もあったが、意外なほど順調だったのは、お江戸日本橋という下町の義理人情の世界のおかげである。小学校や中学校の友人、近隣の人達が、「明ちゃんが開業した!!」と、まだ腕も定かではないのに、私の歯科医院を訪ねてくれた。下町気質の気さくさで、「若いドクターがいるよ！」と、近隣の会社や商家の方々など、多くの方が来院してくださった。

昭和25年　私（後列左）の隣が花田先生、その隣が私の母

時代背景からすれば、長い戦争のあとで歯の治療どころではなく、皆、虫歯や口腔疾患を患っていたし、歯科医師の数が少なかったことも幸運だったのであろう。

とはいえ、戦時中ゆえに不十分な勉強しかしておらず、自信満々な歯科診療というわけにはゆかなかった。そこで戦国武将の毛利元就の「一本の矢は容易に折れるが、矢を三本まとめると折れにくい」という三子教訓状ではないが、開業翌年に後輩の小熊一路君を雇用した。

24歳で初めて人を雇ったのである。こ

最初の診療所で、妻の照子と

れはやはり、商家の次男坊という、生まれ持った遺伝子がそうさせたのかもしれない。そして開業数年目には、花田実君という後輩や村上忠雄君（医学博士）、東歯大より田崎敬博士が応援に駆けつけてくださり、充実した歯科医療を提供できるようになった。

また、当時、歯科衛生士制度はなく、女子医局員を雇っている開業歯科医はいなかったが、俳優養成所の生徒だった私の妻（この頃は婚約者）の妹さんが「アルバイトをしたい」と言うので、診療所の掃除や受付をさせていた。すると、近隣の開業歯科医から「福岡は女性を使って、色気戦法で客引きをしている」という噂を立てられてしまった。現今にすれば、笑い話にもならない。

しかし、患者さんからは信頼されたし、女子医局員の必要性を実感していただけた。その後、若き可愛いお嬢さん方を新規雇用したところ、近隣で「あの歯医者さんは美人揃いだから行ってみな!!」と噂になり、なかにはテレビ局から引き抜きがあった程である。

当時は、大学卒といえども女性の就職先が少なかったこともあるが、当院の医局には慶應、日本女子、聖心、学習院、共立、山脇、和洋など、著名な大学の卒業生が多かった。私の秘書は、米国に留学していた御嬢様が務めてくださった。

歯科医師も国立大、東歯大、日本歯大、日本大、医科歯科大といった名門校卒業で、教授のお墨付きの入局者も多く、活気のある歯科医院として発展していった。

医学博士になれるの!?

多くの患者さんに支えられ、大過なく歯科医院を運営し5年が経った頃、田崎敬先輩が東京歯科大学生理学教室で単一神経の電気生理的研究をしていたことから推薦され、医学博士の学位を取得するため、同教室に入室し研究生となった。

最初は、唾液に含まれるアミラーゼの研究だった。ある日「君、東京学芸大学に行ってくれないか？」と教授から突然言われた。当時、東京学芸大学心理学の斉藤義雄博士は、パブロフの自律神経の条件反射に対抗して、ベヒテレフの運動条件反射の研究をしていたのだが、「一人優秀な（？）研究生を派遣してくれ」との要望があり、抜擢されたのだ。

心理学実験室に出向となった当初は、犬を使って実験していた。しかし、これでは埒が明かないというので、英語やロシア語の文献をもとに「人間における運動条件反射」の研究を始めた。実験は主に夜中に行われたので、私は午後2時に診療を切り上げて、下馬の東京学芸大学に通った。留守中の診療は、東京歯科大学をトップで卒業した後輩、勝股恒美先生にお任せした。彼は語学にも堪能で、私の参考文献は、生理学の最高の解説書である「フルトンの生理学」を読みながら翻訳してくださった。

実験は、人間の下肢の筋肉に端子を当て、電気刺激による筋電図上の変化を測るというものである。波形の大きさを定規で計り、また、反応が起きるまでの潜時も測定することで反射か反応か判断するというものである。現在のようにコンピューターを駆使すれば、極めて容易にできたと思うが、手作業で行う研究チームの努力は大変なものであった。

この成果を1957（昭和32）年、第35回日本生理学会総会で発表したところ、たまたま大阪大学医学部第二生理学教室の吉井直三郎教授の目にとまり、今度は大阪大学に通うようになった。報告レポートは真っ赤に訂正され、追試と実験に明け暮れる日々であった。

私は、研究は麻薬だと思う。夢中になると止められないのである。私が研究に没頭している時、妻は一日1000円の食費で生活を支え、医局員も一丸となって歯科医院を支えてくださった。

お陰で1958（昭和33）年10月7日、32歳のときに大阪大学より目出度く医学博士の学位を受領できた。この成果は、家族はもとより、医局員の心からの尽力の賜と今なお感謝している。

開業14年目となる1962（昭和37）年には、歯科クリニックを3階ワンフロアに拡張し、更に1年後には目黒区祐天寺に戸建ての自宅兼歯科クリニックを開業した。医局員は40名程になり、診療内容も充実していった。

昭和33年　医学博士受領パーティでは、笠置シヅ子さんがお祝いとして歌ってくださった

昭和37年　結婚して7年目、祐天寺の商店街のはずれに土地を購入し、自宅と診療所を兼ねた福岡歯科祐天寺院を開設

昭和38年　本院スタッフ

Akira Fukuoka

昭和47年
結婚50周年「金婚式」での父と母

明徳会の発展

祐天寺に分院を作る際、医療法人の許可が必要となった。対税的なこともあり、社団法人にするか財団法人にするか迷ったが、折も折、政府は開業医の財団法人は許可しないことになり、法人化する歯科医院はすべて医療法人社団となった。法人化すると、数箇所の診療所を持っても経営母体は一つで、種々の意味において統制が取れる。

当法人の名称は「明徳会」とした。苗字帯刀を江戸幕府より許された糸問屋である福岡徳兵衛商店の末裔として、当法人開設者の福岡明の「明」を「徳」の上に乗せ、徳兵衛商店より発展・充実させたいという願いを込めたのである。

ところで「明徳」という言葉は、明徳稲荷という神社もあるように、なかなか大きな意味を持っている。中国古典の〝大学〟の最初に出てくる言葉でもあり、「明徳とは心の鏡であり、鏡は物事を正しく映す力を持つが、心は時として我欲や欲心などが働いて曇らせることがある。この曇りを拭い去って物事を正しく映すこと」とある。

昭和54年　結婚25周年「銀婚式」で

偶然とはいえ、私たち医療人にとって拳々服膺すべき有難い名称をつけたものである。明徳を明らかにすること、それは「利他の心」であろう。

＊　＊　＊

当院には、日本郵船の社員の方がたくさん患者さんとして来てくださっていたが、1974（昭和49）年、仮本社があった場所に新築ビルを建設することになり、3階の一室を借りることになった。当時の日本郵船の役員の方の骨折りで45坪の部屋を借り、郵船ビル院を開設した。人脈の大切さを改めて認識した。

1978（昭和53）年には、東日本橋にある私の実家の1階と2階に、40坪程の技工研究室を設け、当法人の歯科技工を一手に行うことになった。

1986（昭和61）年6月には、市川市末広に一軒家を購入。歯科技工室を東日本橋より移転すると同時に法人化し、㈲ラボ・スクエアとして独立させた。

最後のツーショット。明81歳、照子80歳

＊　＊　＊

1981（昭和56）年、西新宿の星和住宅ビルにある三越歯科診療所が廃止され、同ビル7階の84坪に（医）明徳会サンデンタルクリニックを開設した。これには面白い経緯がある。

当時、三越の社長が経営改革で赤字部門の廃止を行っていたが、三越歯科診療所は不採算部門として、そのまま他の歯科医療法人に譲渡するというのだ。「西新宿は、これから発展するよ」と、後に日本オリンピック委員会会長となった八木佑四郎氏から勧められ、三越の担当者から話を聞くことになった。

当院を含め、東京の五つの著名医療法人に交渉したそうで、「診療体系もよく、健全経営をしているので、三越の委員会において五法人中、御法人が選ばれました」と言われて購入したが、診療所の設備内容は当法人のフィロソフィとは合わず、全面改装をした。その投資額は、今思うとよくできたと思う巨額なものであった。

その後、仄聞するところによると、他の四つの医療法人は採算ベースに合わないということで断ったという。要は三越役員の口車に乗せられたわけである。今となっては笑い話ではあるが、お陰で当法人は更に発展していった。

＊　＊　＊

その後、開業当時の茅場町会館の診療所がビル建替えのため廃止となり、1985（昭和60）年には新川一丁目六甲第二ビル2階に診療室を移し、同時に3階に法人事務局を設置した。一つの事業形態が整い、1990（平成2）年には同ビル1階にリラックスルームを開業、主として難症例の治療に当たった。

1992（平成4）年には、祐天寺院の老朽化に伴って同地に3階建てビルを建設し、1階に新しく開院した。

また、同年秋には、西新宿サンデンタルクリニックを、星和住宅ビル（日本生命保険株式会社所有ビル）より隣接の新ビル、エステック情報ビル（日本生命、第一生命、工学院大学の合同ビル）3階55坪に移転、新宿院として開設した。

Fukuoka

エステック情報ビルにできたサンデンタルクニックにて毎年、新年を祝い小山悠子院長（現在は理事長。院長は、ご子息の小山祐樹氏）と記念撮影

その後の10年の間に、郵船ビル院をワンフロア110坪に拡張し、波動医学研究室、鍼灸マッサージ院RIMを併設し、スタッフも80余名を擁し、充実した診療を提供できる法人に成長していった。

それにしても1980年代は、右肩上がりを続ける好景気が益々膨みを見せ、不安と期待を抱えながら熱狂していた時代であった。

歯科医はサービス業

前述したように私は、大正最後の年に東京下町の日本橋の商家の次男坊として生まれ育った。父は、資本主義社会に生きるKnow Howを子供の頃から仕込んでくれた。それは「①引き、②資本、③技術」である。「引き」は、すなわち「人の引き」＝「信用」、つまり人脈づくりが大切であるということである。

ボロビルの3階に診療室を開設し、5階のたった8坪の自宅に家族4人が住んでいた頃、夜中でも飛び起きて急患を診るのはもちろん、町の祭りには率先して神輿を担ぎ、町の伝染病予防委員として奥様方に「ゴキブリ」の駆除法を教えるなど、診療以外のことにも熱心に取り組んだ。芸能界の方が来院すれば、必ずその方のお芝居を観に行き、楽屋見舞いを届けた。そのお陰で人脈が広がり、私のファンが増えていった。

歯科医業は、自由サービス業である。まず人に好かれ、ファンを持つことが大事なのだ。歯科医は歯科医学、弁護士は法律、会計士は会計学という専門知識を身につけ、それぞれプロの職種となるが、根本はサービス業であることを忘れてはならない、ということである。

医局員教育として、私はこんな例え話をする。

「真珠の首飾りは、その珠一粒ひと粒が綺麗で、大きさも揃っていなければ価値はない。もしも、たった一粒でも傷ついたり曇っていたりしたら、その玉を磨き上げるか、あるいは同じ大きさの綺麗な玉と取り換えるしかない。医局員一人ひとりが皆、輝いている玉になるよう切磋琢磨して、患者さんに喜ばれる魅力的な組織にしよう」。

近年、医療現場は細分化されて、技術偏重に拍車がかかって来た。ミクロの誤差にこだわる緻密さも大切だが、歯科医師自身の人格の陶冶が肝心である。人の心をしっかりとつかめる魅力ある人間になって、信頼という高い次元で診療しなければ、どんなに立派な総義歯が作れても患者さんはそれを放り出してしまう。患者さんをどんどん紹介してくださるご贔屓さん、優秀な人材を紹介してくださる研究機関など、幾多の出会いと人脈のお陰で今日の法人があることを感謝している昨今である。

愛は氣なり

Value added Dentist（付加価値を持った歯科医）という言葉がある。

歯科医術にプラスアルファを持たなければ、患者さんは魅力を感じない。付加価値は何でも良い。人を引きつける何かを持っていれば良い。

私にとっての付加価値は、東洋医学との出会いであった。この70年、東洋医学的療法をベースにした相補代替医療（CAM）を導入して研鑽し、「痛くない、腫れない、怖くない」、リラックスできる歯科医療というパラダイムを作ったが、常に「愛＝氣」が基調となっている。

愛は医療の原動力であり、それを具現化したものがCAMである。このパラダイムが私の法人を支えている。日本歯科東洋医学の中心と言われる程、その道における数々の研究を続け、学会で発表する論文や著書も数えれば切りがない。

思えば60代、70代は、まだまだ若さがあり、精力的に学会活動をしていた。75歳で愚息に理事長を譲ってからは、さらに研究に熱が入った。

しかし、さすがに80代になると体力や気力の衰えを感じるようになり、サンデンタルクリニックの継承者はどうしようかと悶々と考える日々が続いた。

ちょうどその頃、私の傍らで臨床や研究に寄り添い、私の哲学、技術をマスターした小山悠子博士から「息子の祐樹と二人で頑張るから継がせてください」と

平成28年1月　福歯会の新年会　九重親方（元横綱 千代の富士）は毎年出席してくださっていたが、この年が最後となった。合掌

Akira

申し入れがあった。理事長はじめ理事会で検討したが、小山博士なら学術論文も臨床経験も豊富であり、また、独立するのに相応の年齢であったし、当法人に対する貢献度も勘案し継承譲渡することになった。２０１０（平成22）年10月、めでたく医療法人明悠会サンデンタルクリニックが誕生し、今年で９年目である。福岡フィロソフィを実践し、健全経営して患者さんに喜ばれていることは嬉しい限りである。

サンデンタルクリニックを当法人から手離したので、次いで祐天寺院と新川院は新しい診療体系を実践できるよう全面改装した。当法人も再出発し、現在、皆様の御支援で博史理事長、西原専務理事を中心に歯科医師、歯科衛生士、歯科助手、事務局（理事長夫人も）、そして同系列の㈲ラボ・スクエアを含め総勢60余名、健全経営をさせていただいている。感謝！

＊　＊　＊

さて、ここで私の歯科医政暦を少々述べてみたい。

１９５６（昭和31）年、若干30歳で日本橋歯科医師会の理事に就任したが、それは私の才能や人柄が買われたのではなく、当番制だったからだ。「順番だから、お前が理事になれ」と言われ、まぁ使い走り役といったところである。

４年後の１９６０（昭和35）年には、歯科医師会の専務理事に就任した。

専務になると、行政府の人との付き合い、あるいは上部団体である日歯、都歯との関係も深くなり、それぞれの歯科医師会の委員会の委員に抜擢された。日本歯科医師会では社会保険委員会、疑義解釈委員会、厚生委員会、調査室、広報委員会副委員長として、日本歯科医師会のスポークスマン的な要職を歴任した。

東京都歯科医師会でも各委員のほか、国民健康保険、社会保険の診療報酬審査委員会の委員を８年間、務めた。特に社会保険の審査員では、学識経験者代表の開業医として重要なポストを与えられた。そんな忙しい日々を送り、１９６４（昭和39）年には、日本橋歯科医師会の副会長に就任した。当時の日本橋歯科医師会の会員の平均年齢は52歳だというのに、39歳という若い副会長であった。

１９８１（昭和56）年４月、第39回定期総会にて、伝統ある社団法人東京都日本橋歯科医師会の会長に就任した。

当時の歯科界の現状は、危機的なものであった。歯科界では一部を除き、自由診療の減少、保険診療の不採算部門の増加、歯科医師数の増加、人件費、器材その他の変動経費の高騰など、このまま行けば会員の経営行き詰まりは目に見えていた。我々の歯科界の金融機関での評価は、ＡランクからＣランクへ落ち、更にＤランクまで落ちるのではないかと危惧されていた。

将来を見据えた策を練りながら会長を努めて一年半が経った頃、思いがけないことに過労から半年入院、その後一年間は休養せざるを得なくなった。病状はおもわしくなく、生命の危険があるというので、歯科医師会会長を辞任。学会の講演など、すべて断り療養に専念した。

進歩した現代医学で診断がつかず、難しい治療となる病状であっても、東洋医学やBi-Digital O-Ring Testなどの相補代替医療（ＣＡＭ）を駆使すると、人間の体はそれほど柔じゃないということを、身を持って実感した。そこで私はあらゆる代替医療の研究に精進し、お陰で学術書や一般書を十数冊も書き、１００編以上の論文を発表することができた。

近年、「大家族主義経営」を掲げる企業が増えているという。「大家族主義」は、利益を優先せず、苦楽をともにする社員を家族のように信頼し大切にする経営のことだが、福岡歯科では永年に亘り実践してきた。「個の力」と「組織の力」をかけ合わせることで成果となり、医局員一人ひとりの力が集結してこそ、明徳会の成長・発展へとつながったのである。

日本橋歯科医師会の副会長時代

（ふくおか・あきら）
歯科医師、医学博士。
1948年 東京歯科医学専門学校（現・東京歯科大学）卒業。慶應義塾大学医学部歯科学教室、東京歯科大学生理学教室、東京学芸大学心理学実験室、大阪大学医学部第二生理学教室、大阪大学医学部より医学博士号の学位を受領。間中善雄氏に師事して東洋医学を研修し、台湾省歯科医学会総会、全国各地の学会、医師会及びセミナーなどにて講演。1985年 中華人民共和国衛生部の招聘により中医学研修と情報交換を行う。
東京都日本橋歯科医師会会長、日本歯科東洋医学会会長、日本統合医療学会理事、日本催眠学会理事、国際歯科学士会（ICD）会員、東京歯科大学非常勤講師、明治鍼灸大学非常勤講師などを歴任。現在、日本歯科医療管理学会名誉会員、日本バイ・ディジタル O－リングテスト医学会名誉会員、日本歯科東洋医学会名誉会員、日本統合医療学会名誉会員、お江戸日本橋歯科医師会顧問、FOS 統合医療研究会名誉会長、医療法人社団明徳会福岡歯科会長、同福岡歯科統合医療研究所所長。著者は多数。